

高度技能に基づいた伝統工芸サブブランドに関する試験・研究報告(第5報)

－ 加飾工程を表現として捉えるサブブランドデザイン提案 －

Study on sub-brand development based on the traditional craftsmanship (5th report)

－ Design Proposal for a Tsugaru-nuri Sub-brand: Reimagining the Decorative Process as Artistic Expression －

鳴海 藍、小松 勇

本研究は、「津軽塗デザイン開発のための手板制作」(青森県工業試験場、S61、小林)の考え方をベースに、津軽塗の加飾工程の一つ一つを「独立した表現方法」として捉え、試作提案を行っている。第5報では、サブブランド開発における「ブランドの定義」と試作提案について報告する。

津軽塗のコスト構造について下記に示す(図1)。縦軸は使用する総漆量を表し、横軸は製作日数(時間軸)を表しており、津軽塗は、使用する総漆量・製作日数が多ければ多いほどハイコストになる構造となっている。図1に示す通り、津軽塗は様々な工程を経て作られるが、途中工程の表現は上に重ねられる漆に覆われてしまい、顧客の目にはほとんど触れられない。ハイコストであるのに「積み重ね」や「手間」を伝えるにくいジレンマを解消するため、本研究における津軽塗サブブランドでは、塗り重ねた漆の層を研ぎ出すことをせず、仕掛けの凹凸や色の重なりを見せることでカジュアルなデザイン及びコストを下げた商品を目指す。

凹凸を見せた研がない表現方法の提案として、①仕掛けベラを用いて凸模様をつける「仕掛け」を主とした工程板(図2)と、②薄く漆を塗った上に鈴粉を蒔く「妻塗」を主とした工程板(図3)を試作した。本研究で運営する工芸サブブランド研究会において意見聴取を行ったところ、①については「工程が少ないので材料を厳選すれば高級感がでるのでは」、②については「漆特有の透け感があり、表現として伸びしろがあるのでは」と制作にあたって意欲的な意見を得ることが出来た。今後はこのような表現方法を用い、試作品の提案を行っていく。

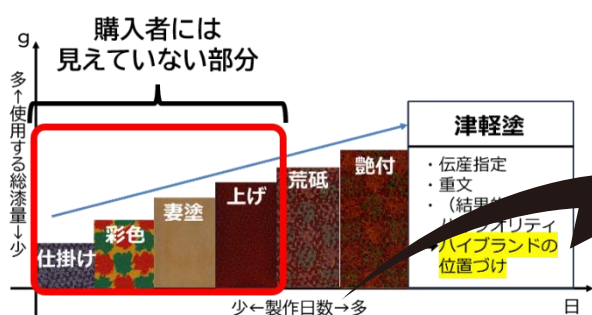


図1 津軽塗のコスト構造



図2 凹凸を見せた研がない表現方法の提案①

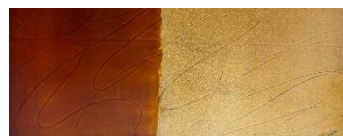


図3 凹凸を見せた研がない表現方法の提案②